

# 中世イングランドにおける聖人崇拜と巡礼 —イースト＝アングリアを中心に—

## Veneration of the Saints and Pilgrimages in Medieval England: East Anglian Cases

山代宏道  
Yamashiro Hiromichi

In eleventh and twelfth century Europe, the Christian World was established along with the spread of the “Church Reform Movement.” When we look at this movement dispersed from the Roman Papacy as an example of “globalization,” saint cults and pilgrimages are very interesting themes for discussion.

My report focuses on East Anglia. Historically, it covers the period of English history when Viking raids and the Norman Conquest took place. Specifically, I examined, as local saints, St. Edmund in the Abbey of Bury St. Edmund, St. Waltheof of Crowland Abbey, which was close to East Anglia, and St. William of Norwich Cathedral Priory. Their careers and characteristics are clarified.

Edmund, king of East Anglia (c. 855-69), became a royal martyr in the war against the Vikings. He became a national saint at the end of the eleventh century and attracted the popular support of ordinary pilgrims, as well as royal patronage, because of his character as the first royal martyr.

Waltheof, the last Anglo-Saxon noble, was executed by William I in 1076. He generously helped Crowland Abbey at its early stage and seemed pious during his confinement. His cult as an Anglo-Saxon saint was established through the cooperation of the Norman abbot Geoffrey.

William, a young Christian boy of Norwich, was alleged to have been killed by Jews. His legend was fabricated by a monk of the Priory, Thomas of Monmouth. For a short period, the saint cult attracted popular support and drew pilgrims.

As universal saints, I briefly refer to St. Jacob and the Virgin Mary. King Henry I founded the Abbey of Reading and gave it a relic of St. Jacob. This abbey became the center of the St. Jacob cult in England and was sometimes more effective in working miracles than Santiago de Compostela.

The cult of the Virgin Mary of Walsingham was initiated by a local widow of good family and some wealth, Richelde de Faverches. The Abbey had two healing wells that indicated the continuity of the place from its days as a pre-Christian sacred site for pilgrims.

In conclusion, it seems that the local saint cults continued together with the universal saint cults following the introduction of the latter to England.

### は じ め に

イギリスの歴史家P.パークは、『文化史とは何か』という著書において、「ミクロストリア」という研究を紹介しながら、「地域の文化やローカルな知識の価値を強調することによる、グローバリゼーションへの対抗意識がみてとれる」（66頁）と指摘している。本報告も「ミクロストリア」のひとつの試み、あるいは、グローバリゼーションとローカルという問題関心にもとづく事例研究であると言える。

中世ヨーロッパの聖人崇拜は、地方的聖人と修道院長や司教、そして信者が結びついて成立発展したが、そこには時代的、地域的特性が見られるのではないか。その際、巡礼たちが崇拜した聖人のタイプはどうであろうか。また、地方的（ローカルな）多様性と普遍的（グローバルな）画一性との関係はどうであったのか、といった問題が考えられる。

## 1 時代的背景

### (1) ノルマン征服

本報告では、中世イングランド、とりわけ、1066年のノルマン征服後の聖人崇拜と巡礼における地域的特性を見るために、事例としてイースト＝アングリアの場合を取り上げて検討する。（末尾の地図中の四角括弧で

囲んだ4巡礼地を参照)

中世のキリスト教世界では、11世紀後半からローマ教皇庁による教会改革運動というグローバル化の波が各地域へと及んでいく。イングランドでも征服後にその影響を受けることになった。その中で、地方的聖人(local saints)から普遍的聖人(universal saints)への移行が見られた。しかし、イングランドでは、普遍的聖人が導入されてからのちも、十二使徒など普遍的聖人を奉じて巡礼地となったところが少ないままであったように見える。なぜであろうか。

このことはイングランドでグローバルな聖地が出現しなかったことを意味するのか。中世キリスト教世界のグローバルな聖地としては、エルサレム(キリスト)、ローマ(聖ペテロ)、サンチャゴ=デ=コンポステラ(聖ヤコブ)などがあげられるが、イングランドのカンタベリー(聖トマス=ベケット)を含めることができるかもしれない。

## (2) 聖人崇拜の興隆

### 1) 聖遺物

西方ヨーロッパでは、とりわけ十字軍遠征以後、東方から普遍的聖人に関する聖遺物が流入した。その結果、ほとんどすべての主要な宗教施設が聖遺物を保持するようになり、聖遺物の売買が行われる「マーケット」が存在したようである。

有名な聖地の数は、修道士や高位聖職者たちがより多くの巡礼者を引き付けようと競うようになるにつれて、ますます増加していった。ほとんどの教会や修道院が、何らかの種類の聖遺物をもっていた。また、ある聖所では、聖職者たちがどうして良いかわからないほどの聖遺物を所有していた。たとえば、カンタベリーでは、400以上の聖遺物が簡条書にされていたという。

### 2) 聖地

エルサレムへと旅することができなかった巡礼者は、ローマへと旅行した。2番目に良い赦免状を受け取るためである。北西スペインにあるサンチャゴ=デ=コンポステラやカンタベリーといった聖地は、それらの聖遺物の価値からすると、等しくローマの次に位置づけられたようである。ローマ教皇庁は聖地間の比較がなされることを許していたようで、たとえば、ウェールズのセント=デイヴィッド司教座教会への2回の巡礼が、ローマへの1回の巡礼と同等であるとみなされることもあった。

## 2 巡 礼

### (1) 巡礼の性格

巡礼は救済や治癒奇蹟を求めて行われた。小教区教会が充実してくると、キリスト教的救済観が浸透していった。それとともに、巡礼は増えていったのではないか。教会の司祭や司教による教会罰、すなわち、悔い改めの行為として課せられる巡礼もあった。

巡礼と結びついていた聖人崇拜は、神への「とりなし」を聖人に求める行為であった。聖人や聖遺物による奇蹟とは、神による奇蹟が、その聖人を通じて行われた、と考えるべきであろう。

通常、人々は、悔い改めといった宗教的理由で巡礼に出かけた。巡礼者の主たる意図は、聖地において祈ることであった。しかし、時々には、世俗的動機をもつ者もいた。聖地で、巡礼者は、冒険的事業(venture)における、またビジネス、愛、戦争における成功、あるいは、病氣や不能(disability)の治癒のために、聖人に対して直接に訴えたのである。

### (2) 巡礼者

イングランドからは、富裕な人々がローマへの巡礼を行うことができた。階層的には社会上層の人々が海外への巡礼に出かけたことはまちがいない。国王、諸侯、司教やかれの従者たちがエルサレム、ローマ、サンチャゴへ巡礼に出かけた。1027年カヌート王はローマへ巡礼を行い、ローマ教会への献金(ピーターズ=ペンス)を約束した。また、国王の国内巡礼としては、ベリー=セント=エドムンド修道院への巡礼が有名である。

ウィンチェスター司教ヘンリーは、ローマ訪問(1149—51年)の帰途にウィンチェスターの司教館を飾るために、古代彫刻等、多くの芸術品を購入して持ち帰ったと言われる。かれはロマネスク芸術の最大のパトロンの人であった。

世俗諸侯や一般の人々にとっては、十字軍などを別にすれば、多くは国内の聖地への巡礼が普通であった。以下、具体的に、イースト＝アングリアの聖人崇拜と巡礼について検討していく。

### 3 聖 人

#### (1) 地方的聖人：イースト＝アングリアの聖人たち

1) 聖エドムンド（ヴァイキングとの戦いで殉教）、ベリー＝セント＝エドムンド修道院。

かれは、869年にデイン人によって殉教したイースト＝アングリア王（841—69、在位c.855—69）である。最古の伝記はAbbo of Fleuryによって書かれた。それは事件が起こったほぼ一世紀のちのことであった。基本的なことは、エドムンドがサクソン血統（stock）の出身であり、子供のときから敬虔なキリスト教徒であったということである。

エドムンドは、855年14歳で東アングル人の王となった。デイン人たちの大軍に直面したことはエドムンドの不運であったかもしれない。それ以前の数年間においても、イースト＝アングリアは、地理的には北海を横切ってやって来るヴァイキングたちの襲撃にさらされていた。デイン人たちのリーダーのひとりがイングワール Ingwarという人物であった。イースト＝アングリアの中心にあるセトフォードに拠点を置き、869年秋の戦闘においてエドムンドを破り捕虜にした。かれはエドムンドに自分の臣下として統治するならば生命を助けることを提案したが、エドムンドはそれを拒絶し、11月20日に処刑された。近くのチャペルに埋葬されたかれの遺骸は、915年に腐敗していないのが発見され、925年頃にはベリーへと移された。

11世紀末に『聖エドムンドの奇蹟録』を作成したハーマン（Herman）は聖遺物に関する最初の控えめな報告をしているが、魔法を行う者、すなわち、病氣治癒者としてのエドムンドの記録は11世紀を待たねばならなかった。カヌート王の即位と1020年ベリーにおける修道院の設立によって、単なるイースト＝アングリアの守護者から全国的なイングランド聖人へとエドムンドが発展するための条件が整ったのであった。一連の国王たち（カヌート、エドワード証聖王、ハロルド）は、かれに敬意を払った。そして、この時期からハーマンが「大衆（mass）巡礼」と呼ぶものが始まったようである。

「ブリテンのいろいろの場所から、多くの人々がかれらの健康のためにその聖人を訪れた。ある人々は、かれらが必要としていたもの（治癒奇蹟）を直ちに受け取り、ある人々は定められた期間の後にそれを受け取った。しかし、だれもが感謝して立ち去ることになった。」

ノルマン征服後、修道院長ポールドウィン（在位、1065—97）とともに、聖エドムンド信仰は新しい段階へと入った。すべてのイングランド人（アングロ＝デイン人）の守護者としてみずからを確立してきていた聖人は、今度は、ノルマン人たちをかれの支持母体につけ加えたのである。

聖エドムンドの聖人崇拜は、修道院の宗教的権威を向上させ、巡礼者の誘致による多大な寄進や献金、すなわち経済的増収をもたらした。巡礼者たちは、聖地で喜捨を行い、土産を買うなどした。巡礼は経済的効果を引き起こしたのである。A. グランスデンの表現を借りれば、ポールドウィンが、より大きな教会堂とより美しい聖所を建設しようとした動機のひとつは、疑い無く、「巡礼交易（pilgrim trade）」を増大することであった。

新しい教会堂では巡礼者たちを引き付けるためのあらゆる努力がなされた。たとえば、巡礼者たちに聖エドムンドについて知らせるため、教会堂内にタブラ（tabula）という殉教者伝を記した看板が置かれた。ハーマンによれば、聖エドムンド崇拜は繁栄し、人びとがイングランド中から旅して来た。贖宥を得たり癒されるためにやって来たのである。

2) 聖ワルセオフ（アングロ＝サクソン聖人とノルマン修道院長の協同）、イースト＝アングリア近くのクローランド修道院。

1102年ウェストミンスターでカンタベリー大司教アンセルムの下に開催された教会会議は、古くから見られた泉を崇拜することを否認したが、さらなる禁止事項をつけ加えている。「何人も、司教の認可なく、大胆な刷新によって、泉、死体、あるいは他の事物を神聖なものとして取り扱ってはならない。我々は、そうした事態が生じていると知っているのであるが。」

中世巡礼の研究者D. ウェップは、ここで禁止されている、死んだ個人の崇拜とは、アングロ＝サクソン人であったワルセオフの崇拜であったとみなしている。ノーサンプトンならびにハンティンドン伯であったワルセオフは、ヘイスティングズの戦いとヨークの反乱においてノルマン人に対してエネルギーに戦ってきていた人物である。かれは、いち早く国王ウィリアムに服従を誓い、その許しを得た。そして、1072年ウィリアムの姪Judithと結婚した。

しかし、ワルセオフは、1075年、伯たちの反乱に加わった。それは、Roger of HerefordとRalph of Norwichによって率いられ、ラルフとロジャーの娘との結婚によって強化されたものである。しかし、その反乱は失敗であった。ワルセオフは、すべてを大司教ランフランクに打ち明けた。ランフランクは、国王の慈悲に身をゆだねることを助言した。しかし、ウィリアムは、今回は許すことなく、反乱者たちを厳しく罰した。ワルセオフは投獄され、反逆罪で裁かれ、1076年5月31日に処刑された。2週間後、ジュディスの懇願と国王の同意によって、遺骸がクローランド修道院に埋葬され、1092年には、その遺骸が教会堂へと移された。かれの遺骸が腐敗していなかったことや、治癒奇蹟が報告された。

歴史家ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーは、聖ワルセオフの奇蹟を伝えている。クローランド修道院長は、ワルセオフの遺体が腐敗していなかったばかりか、ワルセオフの切断された首が身体に再び結合されていたことをウィリアムに語ったという。再び首が結合したことを示唆する細く赤い線のみが認められた。

ウェップは、次のように主張する。聖ワルセオフ信仰は、ノルマン征服後に、土着のイングランド人がかれらの伝統的な聖人たちに相応しい尊敬を与えるのに熱心であり、また、イングランド人やかれらの権利を守るために死んだ人々に名誉を与えたことを示している、と。かれの死が政治的「殉教」であったことは疑問の余地がなかった。イングランド人の目には、かれは侵略者たちに抵抗を試みた無実の人であった。他方、ノルマン人修道士たちは、墓所における奇蹟と集まった群衆をあざ笑った。なぜなら、かれらにとってワルセオフは、聖人ではなく、裏切り者であったからである。

ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーは、この聖人崇拝についてある懐疑的な留保（ためらい）を示している。しかし、奇蹟については、それが、神がワルセオフを是認したことの印であることを受け入れたのであった。

報告者は、ワルセオフ崇拝については、こうした異民族間の対立のみが強調されるべきではない、と考える。なぜなら、そこには、ノルマン人修道院長ジョフリーによる、地方的なアングロ＝サクソン人聖人崇拝の創出と、奇蹟によって巡礼者を誘致するという修道院全体としての動機を指摘することができるからである。

### 3) 聖ウィリアム（作られた聖人）、ノリッジ司教座教会附属修道院。

ノリッジ司教ハーバート＝ロシंगा（在位、1091－1119）と、同時期に修道院教会堂を再建していたベリー＝セント＝エドムンド修道院長ボールドウィンとの競争は激しいものであった。お互いに競って、教会堂の長さを延長するための設計変更がなされていった。ベネディクト派修道士出身であった司教ハーバート＝ロシंगाは、附属修道院としてベネディクト派修道院を建設した。かれは同じベネディクト派の伝統あるベリー＝セント＝エドムンド修道院をライバル視していた。こうした背景において、多くの巡礼者を誘致し、経済的利益を増大させるための聖人を是非とも必要とするようになっていったのである。

こうした中で、1144年ユダヤ人たちによって殺害されたとみなされた12才のキリスト教徒の少年ウィリアムの話が、1169年ころノリッジ附属修道院の修道士Thomas of Monmouthによって創作され、喧伝されていく。

ここで、当時のユダヤ人をめぐる状況について一瞥しておきたい。しばしば、途方もない利率での金貸し（「高利貸業」はキリスト教徒には禁止されていた）におけるかれらの独占的成功や国王の特別の保護下にあるユダヤ人たちの特権的地位は、反ユダヤ主義的感情を生み出していた。さらに、12世紀後半のユダヤ人たちは、ベネディクト派あるいはシトー派両方の、多数の修道院に対して多額の貸し付けを行ってきており、その過程で、修道院のいくつかを破産寸前にまで追い込んでいた。ユダヤ人たちは非常に強力になったので、あろうことか、かれらは実際に修道院内に住むこともあったようである。妻や子供たちといっしょにである。かれらは、ミサが行われている途中に、修道院教会堂内をさまよい歩いたという。

ノリッジの修道士であったThomas of Monmouthによるウィリアム伝で描かれたような、ユダヤ人たちによる毎年のキリスト教徒の少年の儀式的殺戮は、中世イングランドにおける広範ではあるが誤った信仰の対象であった。最もありそうなことは、ウィリアムが、子供たちに対するいわれのない、しばしば致命的な攻撃の犠牲者となった、ということである。かれの遺骸は、森のなかで埋葬されずに発見された。そこから、まず、ノリッジ司教座教会内の参事会室へ、次いで、殉教者たちのチャペル（のちにイエスのチャペルと呼ばれた）へと移された。

聖ウィリアムの遺骸が移葬されると奇蹟が起きるようになった。そして、巡礼者たちが、集まってきた。トマスは、夢の中に先の司教ハーバート＝ロシंगाが現れ、以前は司教座教会の建設資金をまかなうための収入をもたらす所領が必要であったが、今では聖遺物が収入をもたらしていると語った、と伝えている。

ところが、この聖ウィリアム崇拝は、1150／1年ころをピークとして短期間でその推進力を失っていく。ウィリアムの死に関係があると主張されたユダヤ的儀式慣習と結びつける、あるいは、殺した者をユダヤ人と同

定するための、いかなる証拠も存在しないようである。しかしながら、この話は、少年の叔父であるゴドウィンの証言にもとづくものとして伝記の中で主張された。それは、少年がノリッジの皮なめし工の見習いであったが、大助祭の台所で働けることを約束した見知らぬ者によって拐かされた、と主張した。かわりに、少年は、さるぐつわをされ、毛を剃られ、荊の冠で苦しめられ、そして十字架に架けられたのである。

12世紀のノリッジでは、ウィリアムのこうした話に関して、修道院共同体内には疑問と留保が存在していたのかもしれない。たしかに、聖ウィリアム信仰をプロモートする試みは戦略的には失敗したとしか言えないかもしれないが、しかし、一時的にはあれ、巡礼者たちを獲得することで経済的利益をもたらすことに、かなり程度に成功したとみなすことができるのではないか。

#### 4) 地方的聖人崇拜

地方的聖人には教会・修道院の創設者が多く、かれらは、修道院共同体の守護、権利・財産の保護、損害の回避のために働いた。また、巡礼者の病氣治癒を行った。さらに、聖人たちは教会史や修道院史といった地域史（ローカル＝アイデンティティー）において中心的役割を果たしているのである。

#### (2) 普遍的聖人：使徒、マリア。

##### 1) 聖ヤコブ（これはイースト＝アンゲリアの例ではない）。

11・12世紀ヨーロッパは、教会改革運動が広まるとともに「使徒的生活」が理想とされた時代であった。使徒的生活では福音の伝道による人間の救済をめざしていた。この時代は、上から、すなわち、聖職者たちによる司牧責任と、下から、すなわち、信者たちによる救済願望があいまって、種々の宗教形態が実践された時代であったといえる。聖職者の側では使徒的生活が行われ、信者の側では巡礼が行われた。ともにキリストの行動の模倣であり、まさに聖地巡礼とは、キリスト受難の跡をたどる行為であった、と言えよう。

イングランドからもサンチャゴ＝デ＝コンポステラ巡礼へと出かけた人々がいたことが窺われる。国王ヘンリー1世がロンドン西方のレディング修道院へと寄進した聖ヤコブの手の聖遺物は、その修道院をイングランドにおける聖ヤコブ信仰の主要な巡礼地として確立していった。巡礼地としての地位は、自分の息子のために、すでにサンチャゴ＝デ＝コンポステラへ2度も巡礼していたが願いがかなわなかったある男の息子を、その聖遺物が治癒したというエピソードなどを通じて強化されていった。

このエピソードは、ヘンリー1世が建設したレディング修道院が所蔵する聖ヤコブの聖遺物の効力が、コンポステラのそれよりも強大であったことを自慢しているのである。また、そうした貴重な聖遺物を寄贈したのが国王ヘンリー1世であったことを強調したいのであろう。

##### 2) 聖母マリア（人類全体の救済主イエスの母）、ウォルシンガム修道院。

12世紀ヨーロッパでは、それまで救済が語られることが少なかった女性に対しても目が向けられるようになった。すなわち、アダムを誘惑したイヴに連なっており、神のもとからのアダムとイヴの追放、すなわち、楽園追放と人間の原罪に責任があるとして断罪されがちであった女性のために、この時期になると、人類を救うキリストをもたらした聖母マリアという捉え方が強調されてくる。母親と子供のキリスト、マリアの母性、広くは女性への関心の高まりであった。

イングランドのイースト＝アンゲリア地方でも、ウォルシンガムにある聖母マリア修道院が、有名な巡礼地のひとつに発展していった。それは、1150年頃に在地の女領主Richelde of Fervaquesが建てたチャペルに起源をもつようである。そのチャペルは、マリアへの受胎告知があったナザレの修道院と建物の外観が似ていたといわれる。彼女の息子ジェフリーは、聖地エルサレムを訪れていたが、1153年ころ、チャペルにアウグスティヌス派律修聖職者たちの修道院を付け加えている。その後、修道院は巡礼の中心地となっていく。

聖所である聖母のチャペルは、崇敬されて椅子に座るマリア像をもっていたが、それに加えて、教会堂の東側には「癒しの井戸」(healing wells)が存在していた。それは、キリスト教以前のケルト的な信仰の対象としての泉の存在を示唆しているようでもある。

##### 3) 普遍的聖人崇拜

普遍的聖人崇拜に関する奇蹟としては、病氣治癒とともに、隷属状態からの解放や捕らわれの身から自由になる（鎖が切れる）奇蹟が報告されている。

## おわりに

11世紀、キリスト教的世界が成立するにつれ、グローバルな「教会改革運動」と普遍的聖人が要請されていた。しかし、目撃されたのは、時代的、地域的特性をもつローカルな聖人崇拜と普遍的特性をもつグローバルな聖人崇拜の併存状態であった。前者から後者への移行のみが強調されるべきではない。

サンチャゴ＝デ＝コンポステラの聖ヤコブは、「神の騎士」「戦争の守護聖者」から「モーロ人（イスラム）殺し」となることで、キリスト教世界の普遍的聖人となった。異教世界との境界に近い聖地への巡礼旅行は、より危険なものになったはずであるが、かえって巡礼者を引きつけたのかもしれない。

イングランドでは、カンタベリーのトマス＝ベケットが、イングランド王ヘンリー2世と対立して教会のために殉教したのであったが、それはキリスト教徒同士の対立であった。大陸からの少なからぬ巡礼者がいたとは言え、イングランド国内の巡礼が主であったのであろう。

イースト＝アングリアのエドムンド王はヴァイキングと対立して殉教した。異教徒との対立という側面を強調することができる。同時に、最初の「王である聖人」という性格が強いことから、国王たちの支持を得たことが注目される。

少年ウィリアムは、対ユダヤ人という異教徒との対立の図式を作り出していたが、それは、キリスト教世界内における対立図式に留まった。

ワルセオフは、アングロ＝サクソンとノルマンの融合としての聖人崇拜の事例であるが地方的なままに留まった。その融合が不十分であったことに加えて、異民族間の融合よりも、異教との対立図式の方が巡礼者たちにアピールしたのかもしれない。

11・12世紀には、エリートの宗教から民衆宗教へという変化が見られる。一般民衆（都市民や農民）が救済対象となり、かれらへの司牧活動が重視されていく。そのことと小教区教会組織の確立が連動していた。上からの教会改革と、下からの宗教的覚醒という、両方向が交差する時期であった。

しかし、従来からの地域の民衆信仰（地方的聖人）はすでに存在していた。ローマ教皇庁による列聖化とは、地方的聖人の権威づけとともに、グローバル化を意味した。すなわち、11・12世紀の教会改革は、グローバル化の動きの中で、普遍的聖人をプロモートしていった。聖人もキリスト教世界レベルのものが要請されていたと言える。

グローバルな巡礼地となるためには、ローマ教皇、地域の世俗勢力（王）、そして教会勢力（司教や修道院長）の協同と振興（プロモート）が不可欠であった。しかし、多くの場合、巡礼者たちを引きつけた要因は、地方的聖人崇拜と普遍的聖人崇拜のいずれの場合も同様であった。したがって、中世イングランドの事例分析からすると、普遍的聖人が導入されてからも、伝統的に地域的事情によって出現してきていた地方的聖人に対する人々の崇拜は消滅することなく、併存していったと考えることができるのではない。

最後に、今回のシンポジウムのための問題提起をしておきたい。現在のグローバル世界において、すなわち、地球世界における巡礼はいかにして可能なのが問われるべきであろう。四国遍路という地域的事例について、たとえば、世界遺産となるためには、それが、日本の特性をもつ巡礼となり、さらに、世界的普遍性をもつ巡礼へと変化できるのかどうか。あるいは、四国遍路がもっている地域的重要性を、人類にとっての重要性として十分に説得できるのかどうか。あるいは、本報告で見てきたように、両者の関係は、ローカル（地域的）なもの、グローバルなものとの併存関係にとどまるのか。こういった問題提起が可能ではないか。

（文献リスト）

J.Adair, *The Pilgrims' Way : Shrines and Saints in Britain and Ireland*. London, 1978.

J.W.Alexander, "Herbert of Norwich, 1091-1119: Studies in the History of Norman England," in W.M.Bowsky ed., *Studies in Medieval and Renaissance History*, Vol.VI (1969). pp.115-232.

I.Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral: Church, City and Diocese, 1096-1996*. London, 1996.

F.Barlow, *The English Church 1066-1154*. London, 1979.

G.Bosanquet trans., *Eadmer's History of Recent Events in England*. London, 1964.

R.A.Brown, *The Normans*. Woodbridge, 1984.

M.Chibnall, *The Normans*. Oxford, 2000.

R.H.C.Davis, *The Normans and Their Myth*. London, 1976.

B.Dodwell, "Herbert de Losinga and the Foundation," in I.Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.36-43.

- D.C.Douglas, *The Norman Achievement, 1050-1100*. London, 1969.
- D.C.Douglas, *The Norman Fate 1100-1154*. Berkley, 1976.
- D.C.Douglas, *William the Conqueror: The Norman Impact upon England*. Berkley, 1964.
- D.H.Farmer, "Some Saints of East Anglia," in M.Barber, P.McNulty and P.Noble ed., *East Anglian and Other Studies Presented to Barbara Dodwell*. Reading University, 1985. Pp.31-49.
- D.H.Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints*. Oxford, 1990 (1978) .
- B.Golding, *Conquest and Colonization: the Normans in Britain, 1066-1100*. London, 1994.
- A.Gransden, "Baldwin, Abbot of Bury St Edmunds, 1065-1097," *Anglo-Norman Studies [ANS]* , IV (1981) 1982, pp.65-76.
- D.Greenway trans., *Henry of Huntingdon, The History of the English People 1000-1154*. Oxford, 2002 (1996).
- C.Harper-Bill ed., *English Episcopal Acta VI: Norwich 1070-1214*. Oxford, 1990.
- C.Harper-Bill, "The Medieval Church and the Wider World," in I.Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.281-313.
- C.Harper-Bill, "Searching for Salvation in Anglo-Norman East Anglia," in C.Harper-Bill, C.Rawliff, & R.G.Wilson ed., *East Anglia's History: Studies in honour of Norman Scarfe*. Woodbridge, 2002. pp.19-39.
- C.Harper-Bill & E.van Houts ed., *A Companion to the Anglo-Norman World*. Woodbridge, 2002.
- C.H.Haskins, *The Normans in European History*. New York, 1966(1915).
- H.Mayr-Harting, "Functions of a Twelfth-Century Shrine: The Miracles of St. Frideswide," in H. H.Mayr-Harting & R.I. Moore ed., *Studies in Medieval History Presented to R.H.C. Davis*. London, 1985. pp.193-206.
- R.A.B.Mynors, R.M.Thomson & M.Winterbottom ed., *William of Malmesbury: Gesta Regum Anglorum* , 2 Vols. Oxford, 1998.
- T.Pestell, "Monastic Foundation Strategies in the Early Norman Diocese of Norwich," *ANS*, XXIII(2000),2002. pp.199-229.
- T.Pestell, *Landscape and Monastic Foundation: Establishment of religious houses in East Anglia, c.650-1200*. Woodbridge, 2004.
- A.Petzold, *Romanesque Art*. London, 1995.
- N.Pevsner, *The Buildings of England: North-East Norfolk and Norwich*. Harmondsworth, Middlesex, 1970 (1962) .
- H.W.Saunders ed., *The First Register of Norwich Cathedral Priory*. Norwich, 1939.
- F.S.Scott, "Earl Waltheof of Northumbria," *Archaeologia Aeliana*, 4<sup>th</sup> ser. 30 (1952) pp.149-215.
- R.W.Southern, *The Making of the Middle Ages*. London, 1953.
- K.Sugden, *Walking the Pilgrim Ways*. Newton Abbot, Devon, 1991.
- J.Sumption, *Pilgrimage: An Image of Medieval Religion*. London, 2002(1975).
- N.Tanner, "The Cathedral and the City," in I.Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.255-280.
- E.van Houts trans., *The Normans in Europe*. Manchester, 2000.
- C.Watkins, "The Cult of Earl Waltheof at Crowland," *Hagiographica*3 , (1996) pp.95-111.
- D.Webb, *Pilgrimage in Medieval England*. London, 2000.
- D.Williamas, "The Crowland Chronicle 616-1500," in Do., ed., *England in the Fifteenth Century*. Woodbridge, 1987. pp.371-90.
- D.Wollaston, "Herbert de Losinga," in I.Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.22-35.
- G.Zarnecki, "Henry of Blois as a Patron of Sculpture" in S.Macready & F.H.Thompson ed., *Art and Patronage in the English Romanesque*. London, 1986. pp.159-172.

秋山聰『聖遺物崇敬の心性史—西洋中世の聖形と造形—』講談社選書メチエ、2009。

青山吉信『グラストンベリー修道院—歴史と伝説—』山川出版社、1992。

荒正人『ヴァイキング—世界史を変えた海の戦士—』中公新書、1968。

朝倉文市『修道院—禁欲と観想の中世—』講談社現代新書、1995。

浅野和生『ヨーロッパの中世美術—大聖堂から写本まで—』中公新書、2009。

P・バレ、J・N・ギュッルガン、五十嵐訳『巡礼の道・星の道—コンポステラへ旅する人びと』平凡社、1986。

P・パーク、長谷川貴彦訳『文化史とは何か』法政大学出版局、2008。

R. H. C. デーヴィス、柴田忠作訳『ノルマン人—その文明学的考察—』刀水書房、1981。

ハンス＝ヴェルナー＝ゲッツ著、津山拓也訳「死に向けた人生？—中世の死生観—」同『中世ヨーロッパの万華鏡、第2巻、中世の聖と俗—信仰と日常の交錯する空間—』（八坂書房、2004）pp.135-203。

C. H. ハスキンス、野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社、1985。

- 星野英紀『巡礼—聖と俗の現象学—』講談社現代新書、1981。
- 池上俊一『ロマネスク世界論』名古屋大学出版会、1999。
- 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス—西欧世界へのアラビア文明の影響—』岩波セミナーブックス、1993。
- 陣内秀信『南イタリアへ！ 地中海都市と文化の旅』講談社現代新書、1999。
- R. マンセッリ、大橋喜之訳『西欧中世の民衆信仰—神秘の感受と異端—』八坂書房、2002。
- 野口洋二『中世ヨーロッパの教会と民衆の世界—ブルカルドゥスの贖罪規定をつうじて—』早稲田大学出版部、2009。
- N. オーラー、井本しょう二・藤代幸一訳『巡礼の文化史』法政大学出版局、2004。
- N. オーラー、藤代幸一訳『中世の旅』法政大学出版局、1989。
- R. ウルセル、田辺保訳『中世の巡礼者たち—一人と道と聖堂と—』みすず書房、1987。
- 関哲行『スペイン巡礼史—「地の果ての聖地」を辿る—』講談社現代新書、2006。
- 関哲行『ヨーロッパの中世4、旅する人びと』岩波書店、2009。
- 四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、2007。
- R. W. サザーン、森岡敬一郎・池上忠弘訳『中世の形成』みすず書房、1978。
- 杉谷綾子『神の御業の物語—スペイン中世の人・聖者・奇跡—』現代書館、2002。
- 高山博『中世地中海世界とシチリア王国』東京大学出版会、1993。
- 高山博『神秘の中世王国—ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路』東京大学出版会、1995。
- 高山博『中世シチリア王国』講談社現代新書、1999。
- 植島啓司『聖地の想像カーなぜ人は聖地をめざすのか—』集英社新書、2000。
- 馬杉宗夫『大聖堂のコスモロジー—中世の聖なる空間を読む—』講談社現代新書、1992。
- J. ヴェルジュ、野口洋二訳『入門 十二世紀ルネサンス』創文社、2001。
- 渡辺昌美『巡礼の道—西ヨーロッパの歴史的景観—』中公新書、1980。
- 渡辺昌美『中世の奇蹟と幻想』岩波新書、1989。
- 山辺規子『ノルマン騎士の地中海興亡史』白水社、1996。
- 山折哲雄『巡礼の構図—動く人びとのネットワーク—』NTT出版、1991。
- 山代宏道「中世イングランドにおける修道院建設と地域支配（ヘゲモニー）」『西洋史学報』21（1993）pp. 1-18。
- 山代宏道「1075年反乱と歴史家たち」『広島大学文学部紀要』55（1995）pp. 79-98。
- 山代宏道『ノルマン征服と中世イングランド教会』1996、溪水社。
- 山代宏道「ノルマン征服と異文化接触」『中世ヨーロッパに見る異文化接触』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想、溪水社、2000）pp. 85-125。
- 山代宏道「バイユー=タペストリーにみる文化的多元性」『中世ヨーロッパ文化における多元性』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想（溪水社、2002）pp. 7-44。
- 山代宏道「ノルマン征服をめぐる「危機」の諸相」山代宏道編『危機をめぐる歴史学—西洋史の事例研究—』（刀水書房、2002）pp. 209-227。
- 山代宏道「中世イングランドの多文化共生—「グローバリズム」と「ローカリズム」—」『中世ヨーロッパと多文化共生』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想（溪水社、2003）pp. 7-42。
- 山代宏道「中世ヨーロッパにおける巡礼の旅—時空間移動の視点から—」『広島大学大学院文学研究科論集』63号（2003）pp. 33-50。
- 山代宏道「中世ヨーロッパの旅—騎士と巡礼—」『中世ヨーロッパの時空間移動』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、中尾佳行、地村彰之、四反田想。溪水社、2004）pp. 7-45。
- 山代宏道「中世イングランドにおける排除と寛容—教会改革運動とノリッジ—」『中世ヨーロッパにおける排除と寛容』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、中尾佳行、地村彰之、四反田想。溪水社、2005）pp. 33-66。
- 山代宏道「中世イングランドの「グローバリゼーション」—教会改革運動とノリッジ—」『西洋史学報』32（2005）pp. 44-61。
- 山代宏道「中世イングランドにおける生と死—聖人・治癒・救済—」『中世ヨーロッパにおける死と生』（共著者：水田英実・山代宏道・中尾佳行・地村彰之・四反田想・原野昇、溪水社、2006）pp. 9-39。



